



高砂香料のモニュメント

「高砂香料」 楠の縁

岡 茂光・栗原洋三

蒲田モダンの主役の人々が抱いた願いは共通していました。それを言葉に表すと「西欧先進諸国に追いつけ、追い越そう」でした。しかし、これは近代化に遅れをとった日本の喫緊の課題でありながらも実現には多くの困難が立ちただかっていました。しかし「蒲田モダン」の主役の人々の意志は強固であり、願いを叶えるために彼らのとった行動は相手の懐に飛び込み、身をもって先進国の事情を学ぶことでした。

黒澤タイプの創業者である黒沢貞次郎、大倉陶園の創業者長男である大倉和親、松竹キネマ蒲田撮影所創業者、大谷竹次郎の末弟、白井信太郎はアメリカに学び、各務クリスタルを興した各務店三はドイツに渡り、彼らがお手本とした先輩各国の事情と空気を肌で吸収し帰国後「蒲田モダン」として花を咲かせていきました。

本編の主人公である「高砂香料」の創業者である甲斐庄楠香（かいのしょうただか）も明治四三年から大正二年

にかけての四年間、香料の本場欧州に留学、フランス、スイスの香料会社で身をもって研究にいそしんだのです。ところが彼は日本出発前にはフランス語の知識を全く持っていないでました。とにかく行けば何とかなる、「一念岩をも通す」の心意気だったのでしょう。写真から窺える楠香は物静かな紳士、一体彼はどのような男だったのでしょうか。

楠香は明治一三年（二八八〇）、楠木正成の子孫として京都に生まれ、京都帝国大学で化学を専攻し卒業後も大学に残り香料化学の研究に没頭しました。しかしながら日本にとどまっていたの研究は限界があることを感じた彼は、単身香水の本場に行くことを決断しました。途中、ベルギーで半年以上もフランス語の勉強をした楠香は勇躍南フランスのグラスースへと入りました。フランスの八〇%の香水を生産している当地はさながら香りの都で天然香料を学ぶには絶好の街でした。しかし彼の前には語学よりも高い壁が立ちただかりました。それは、東洋人排斥、「目的は秘密を盗みに来たに違いない」帰ってくれ。

途方に暮れた楠香でしたが、諦めませんでした。「虎穴に入らずんば虎児を得ず」、彼はたどたどしいフランス語を操り、町で会社の職工さんと人間関係を作っていきました。その話が会社上層部に伝わり見習いとして工場に入る

ことを許された楠香は一心不乱に香料について学び、彼の真摯な態度は「禁断の扉」と言われていた香料調査室への立ち入りが認められました。更には会社上層部から人造香料における世界的企業であるジボタン社（スイス・ジュネーブ）への紹介状を得て同社の研究生としての入社が認められました。

帰国後、大正九年（一九二〇）に同じ志を持つ技術者九名と「高砂香料」を設立し蒲田に拠点を構えました。同社は大戦をはじめとする幾多の困難を乗り越え、今なお蒲田東口前のアロマスクエアで日本最大の合成香料会社として成長を続けています。

最後に、サブタイトルの「楠の縁（えにし）」についてご紹介いたします。「香料の原料である樟（しょう）の木はアジアが宝庫だ。従って、日本が地の利を生かせば西欧を超える香料を作ることが出来る」。これは楠香が会社設立に述べた言葉です。この中で香料の原木と述べている樟は楠とも呼ばれており、大田区の木として制定されています。楠香の先祖は楠木正成、彼は正成に導かれるように楠香の名前のもと、楠の香りである香料を追求し、研究成果としての会社を楠とゆかりのある大田区、蒲田に求めたのです。

参考文献

「欧州留学中の所見と所感」 甲斐庄楠香 ミツワ文庫
「蒲田モダン」 大田観光協会



アロマスクエア 最上階に本社(大田区蒲5-37-1)